

茂呂真弓 (学籍番号 200621340)

研究指導教員：後藤嘉宏

1. 研究の目的・背景

本研究の目的は、演奏者が何(誰)とどのようにコミュニケーションするのかを明らかにすることである。つまりこの研究は、音楽学とコミュニケーション論の交わった領域に位置づけられるが、そういった研究は少なく、唯一大串健吾の「音楽演奏とコミュニケーション」(1996)のみが、本研究の直接的な先行研究といえる。大串は、クラシックに着目しながら、演奏者は、楽譜のみではなく、楽譜に書かれていない細部の表現を解釈することを通じて、鑑賞者とコミュニケーションすると述べている。しかし、クラシック以外にも音楽は存在し、鑑賞者以外の人とのコミュニケーションも存在する。加えて、演奏者は楽譜だけでなく音源という媒体にも影響を受けていると考えられる。そこで、本研究では、既存のコミュニケーションモデルを下敷きに、軽音楽サークルにおける演奏者に着目し、楽譜や音源(これらを本研究では、「オリジナル音楽資源」とする)の解釈に影響を与えているものは何かについて、その影響関係を明らかにした。

2. 演奏者に影響をおよぼす影響諸源

2回のプレ調査を行った結果、演奏者に影響を及ぼす影響諸源は次のもので構成されることがわかる(図1)。演奏者は自分で出した音などに対しフィードバックを行うため、「演奏者自身」という要素が考えられる。また、複数人で演奏する場合には、「仲間」という要素が出てくる。そして、演奏する際には元となる既存の曲があり、それは「楽譜」や「音源」、「その他(機材など)」といった形態で提供される。さらに、「鑑賞者」という要素も想定される。ここでは、鑑賞者は2つの要素に分けることができる。それは、演奏者が練習をする際に想定するであろうものと、実際の演奏時のものである。そのため、要素として「想定される鑑賞者」と「実際の鑑賞者」の

2つを挙げる。

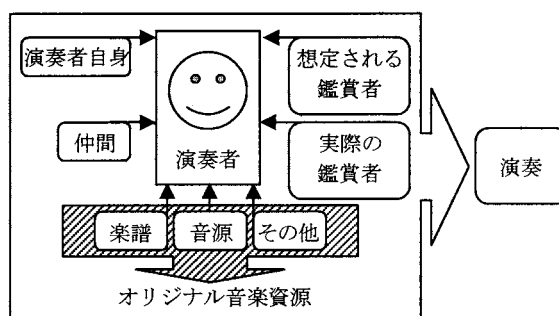


図1 演奏者に影響を及ぼす影響諸源

3. 仮説

演奏者自身のライフヒストリーが、演奏者の「オリジナル音楽資源に忠実に演奏しようとするか否か」という意識に影響を与える、と仮説を立てた。具体的には、楽器歴などの音楽に関する基礎的条件ごとの違いによって、被調査者の演奏に対する意識や行動が変化することを探っていた。これらの相関関係を見ていくことで、実際に演奏する際に、影響諸源の何に影響を受けるのかを考察した。

4. 調査方法

3.「仮説」で示した内容を明らかにするために、グループインタビュー調査を実施した。雪だるま式サンプリングを用い、7バンド、計25名に対して実際に調査を行った。また、補足的にフォローアップインタビューで個人へも調査を行うことや、参与観察で実際のライブ演奏の様子を調査することで、精緻化をはかった。

5. 調査結果

今回の調査から、以下の点が明らかになった。

- ①オリジナル音楽資源を曲の演奏という形で再現する場合において、全ての被調査者が楽譜よりも音源を重視していたが、2つのケースにわかれた。1つは、「初めに楽譜で構成を捉えてから音源を聞き込んでいく」ケースで、ピアノ経験者が

* "Music and Communication : Focusing on awareness about original music resources in the amateur pop music clubs of the university" by Mayumi MORO

多くみられた。もう1つは、「最初に音源を聞き込んで、分からないところのみ楽譜を参照する」ケースであった。

- ②「オリジナル音楽資源に忠実か否か」という点でも、2つのケースにわかれた。1つは、「忠実にしようとするができない」のケースで、担当楽器経験歴が5年以内で、ノンコピー（自分たちで作詞作曲した曲を演奏する）バンドを経験したことがない、あるいは経験したいと考えていない者（以下、「ノンコピーバンド志向無し」とする）であった。こちらのケースでは、担当楽器経験歴の浅さも加わって、鑑賞者は意識されず、影響源とはならないことが分かった。もう1つは、「そもそも忠実にしようとしなない」というケースで、こちらは担当楽器経験歴には関係なく、ノンコピーバンドを経験したことがある、あるいは経験したいと考えている者（以下、「ノンコピーバンド志向有り」とする）であった。こちらのケースではほとんどの者が鑑賞者を意識していた。

6. まとめと考察

今回の調査では、軽音楽サークルにおいては、音源が重視されているが、あくまでも雰囲気や流れ、ニュアンスを掴むためにのみ使用され、バンド練習を通して曲をアレンジし、オリジナル音楽資源とはまた違うものを作り上げていくことがわかった。その際、演奏者に影響を与えている要因は、主に2つあげられた。1つ目は、コピーする際、ピアノ経験者ほど楽譜を見た上で音源を聞き込むのに対し、そうでない者は、音源を聞き込み、それだけでは分からない部分を楽譜によって補足するという傾向の差があった。2つ目は、ノンコピーバンド志向有りの者ほど、鑑賞者の反応を意識し、また、被調査者自身が鑑賞者の立場のときに重視するか否かにかかわらず、演奏者であるときには総じて歌詞を重視する傾向にあった。

本調査では、次のようなことがいえる。ノンコピーバンド志向無しには担当楽器経験歴5年以内の者しかいないのに比べ、ノンコピーバンド志向有りに担当楽器経験歴が5年以内の者と5年以上の者が混在している。このことより、担当楽器経験歴が長くなるに従って、他者を意識し、その反応を想定して振る舞うようになる、つまり熟練するに従ってノンコピーバンド志向になるという結果が得られる。し

かし、ノンコピーバンド志向有りの者にも無しの者にも、ともに担当楽器歴5年以内の者が存在していたが、この志向の差に何が影響しているのかは見取ることができない。

今回の調査においては、個人のバックグラウンドやライフストーリーからの影響がほとんど現れなかったため、仮説は強く支持されなかったといえる。しかし、個人に対するインタビューをより詳細に行うことによって、別の視座が生まれる可能性はある。例えば、今回はアマチュアを調査対象としたが、軽音楽サークルには、音楽を専門的に学んでいる人や、本格的にノンコピーバンドとして活動している人などがいる。また、軽音楽以外の音楽のジャンルも存在している。そのような演奏者にも調査を行い、比較することによって、音楽におけるコミュニケーションの実態がより明確になるだろう。

今回の調査において演奏に影響をあたえるいくつかのものを知ることができた。しかし、自分以外の「仲間」や「鑑賞者」といった、予想された他者の期待をどう取り入れるか、また、他者の期待のなかで相互行為、つまり演奏していくことに対する意識についての質問が欠けていた。

以上のような上述した反省を活かし、問題点を克服することで、コミュニケーション論や音楽学、およびその交わる学際領域において研究を進めていくための一助となりえるのではないかと考える。

文献

- [1] 大串健吾. 小特集, 音によるコミュニケーション: その進化と個体発達: 音楽とコミュニケーション. 日本音響学会誌. 1996, vol. 52, no. 7, p. 558-562.
- [2] 土屋賢二. 猫とロボットとモーツァルト: 哲学論集. 勁草書房, 1998, 240p.
- [3] 高山忠雄. 安梅勅江. グループインタビュー法の理論と実際: 質的研究による情報把握の方法. 川島書店, 1998, 190p.
- [4] K・F・パンチ. 社会調査入門. 川合隆男訳. 慶應義塾大学出版会, 2005, 447p.
- [5] 船津衛. コミュニケーション・入門: 心の中からインターネットまで. 有斐閣, 1996, 227 p., (有斐閣アルマ).
- [6] 佐野清彦. 音の文化誌: 東西比較文化考. 増補, 雄山閣, 1998, 262p.